

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

2019.6

No.12

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより



平和の絵—「戦争と平和」

20点連作—第10作

西村計雄 作

聖なる沖縄の空

平和の鐘は四方に鳴りひびく

300号

176.1×305.4×6.5 cm

沖縄
平和祈念堂
所蔵絵画紹介

〈制作意図〉 20数万の尊い人命を失った沖縄戦終焉の地・沖縄摩文仁の丘。その聖なる空に鳴りひびく「平和の鐘」。人類の悠久平和を希ってそそり立つ沖縄平和祈念堂から、さわやかな風のにのり沖縄島の上を越えて全世界に向かって鳴りわたる。

(昭和57年1月14日寄贈)

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。

2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

沖縄から世界に向けての平和発信

レクイエムコンサート〜鎮魂への思い〜

沖縄県立芸術大学教授 庭野 隆之



私は1979年から6年ほど当時の旧西ドイツ北方のハノーファーという都市に留学していました。北ドイツは第2次世界大戦での空襲でひどく被害にあった地方で、特にハノーファーは工業都市だった事もあり、その被害は甚大であったと聞いています。なかでも旧市庁舎は、今でも過酷な戦火を受けて廃墟のように真っ黒となった状態であり、広島に原爆ドームと同様に戦争を忘れてはならない記憶としてこの地でも保存されています。著しく発展を遂げた他の街並みとは対照的に変わり果てたその姿に目をやるたびに、私は過酷な戦争での数多くの犠牲者の方々の事を思わずにはおれず、手を合わせていました。

私が沖縄県立芸術大学音楽学部創設の際に赴任したのが平成2年4月のことです。当時、まだ建設中の音楽学部の校舎の周囲には多数の石壁などが残っていたのですが、その壁には大砲や機銃掃射であろう銃弾でえぐられた無数の痕が生々しく残っていました。沖縄という新しい土地へ赴任して、今後の教育活動へ新鮮な思いでいた私ですが、その無言で異常と言える爪痕に締めつけられるような胸の痛みを感じ、その記憶は現在も鮮烈に蘇ってきます。戦争による痛々しい爪痕はドイツや沖縄に

限らずいたるところに存在します。戦争について考えるとき、理不尽な戦争至上主義の教育による正当化された殺人が行われていたという事が事実であれば、教育に携わる者としてその重要性を考えずにはおれません。私は戦争を経験していません。私は戦争を経験していません。私がおとずれたりしていました。そのような私が、ほぼ縁もゆかりもない沖縄へ教育のために来たことには、何か意味があるのかもしれないと常に感じていました。

レクイエムとは死者のためのミサ曲のことですが、逝きし者のための祈りとして始まる序奏は、モーツァルトのレクイエムでも「主よ彼らに永遠の安息を与えたまえ」と深く流れる祈念として歌われます。モーツァルトの絶筆とされているこのレクイエムは、第10曲目の涙の目「ラクリモーザ」最初の8小節までで未完の作品となります。病状の悪化により、彼は再び立ち上がることは無かったのです。(1791年12月5日没)この作品は依頼され作られたというのですが、モーツァルトはすでに自分の運命を悟り、自分のために作曲したのではないかと思わず

にはおられません。しかもこの作品は、人間が創作したとは思えないほど天声的で素晴らしく、世界遺産ともいえるこのレクイエムを沖縄平和祈念堂で演奏できることは私にとって感無量な事であります。

レクイエムコンサートを始めるきっかけとなったのは、平成27年6月の公益財団法人沖縄協会前専務理事・比嘉正詔氏からの演奏のお誘いでした。比嘉前専務理事は沖縄にける24万人余りの戦没者の慰霊と恒久的な世界平和を祈念するために、沖縄での慰霊の月である6月にモーツァルトのレクイエムを平和祈念堂で演奏し、恒例行事として定着し発展させたいという、非常に強い思いを私にお話しくださいました。もちろん私はすぐさま賛同し、比嘉康春学長と糸数ひとみ前学部長の協力、指示のもと、平成27年12月に最初のプレコンサートとして、県立芸大と沖縄協会の共催によるレクイエムコンサートが実現しました。若い時から戦争について学ぼうとあちらこちらを巡ってきた私は、比嘉前専務理事からのお声かけに心が震えました。私が沖縄へやってきた意味のひとつがこれかもしれないと思っただけです。これまでの4回(プレコンサート含む)のレクイエムコンサートは、常に私の重要な音楽活動であり、人

生の大きな使命と思い演奏してきました。さらに比嘉前専務理事から、「モーツァルトレクイエムを沖縄戦で亡くなられた方々に聴かせたい」という思いが伝わってきたので、私もその思いを込めて演奏を捧げてまいりました。そのような私達の思いが伝わっているのでしょうか、指揮者である私は祈念堂の沖縄平和祈念像に相對して指揮をすることになるのですが、その像の周りにはたくさんの方々の霊がレクイエムを聴きに集まっています。6月の慰霊の日が近づくと毎年思う事ですが、現在を生きる私達が誓うべきは、2度とこのような戦争を起こしてはならないという事であり、戦争の記憶を風化させないように次世代に伝え続けることだということです。

沖縄で慰霊の月の6月にレクイエムコンサートを行うことは、鎮魂と世界平和祈念への深い意味を持ち、戦争の歴史に立ち向かい平和の尊さを確かめるという事を、沖縄から世界へ発信していきたいと私は思うのです。是非、平和祈念堂でのレクイエムコンサートを聴きにいらしてください。

沖繩平和祈念堂に おける平和学習

沖繩平和祈念堂には年間多くの小学校から高等学校の児童生徒が訪れ、沖繩戦記録映画の鑑賞、平和集会、戦争体験者講話、平和祈念セレモニーやコンサート等を行っている。(平成30年度39,857人)その一部を紹介する。

平成31年1月24日、名護市立名護小学校(14人)が訪れ平和集会を行った。集会後、生徒3人から寄せられた感想文を紹介する。

「平和集会を終えて」

「名護小学校6年生の言葉」

平和祈念堂では、ビデオが強く心に残っています。

戦争は、忘れたくても忘れられないもの。

自分だけ生きて帰ってきて、くるしい。日本兵よりアメリカ兵のほうがやさしかった。

泣いている子どもみんなが、日本兵に首をしめられ殺された。

戦争は、人間の魂をうばうだけでなく、人間らしさをうばうこわいものなど、いろいろなことを学びました。

語っていた人は、これで安らかにねむれるわけがないと言っていました。

いろいろな人の思いを大事に身近な問題から解決していきたいです。

平和祈念像には、山田真山さんの思いがこめられていて、初めてこの祈念像をみれたので、とてもうれしかったです。像

の手がだいたい身ちよう位でとても大きかったです。

いろんなことが学べてよかったです。ありがとうございました。

(6年1組 大城壮菜)

平和祈念堂では、沖繩戦の様子をビデオで見ました。

ビデオには、戦争を忘れようとしても決して忘れる事ができない。今だにその日を忘れる事ができない。と言う人も数多くいる事がわかりました。

あと、一番の犠牲者は子どもやお年よりだったそうです。戦争は、進むは地獄、止まったも地獄だったそうです。私はこのビデオを見て、戦争はやっても意味がない、やっても大切な物をうしなうだけということを感じました。

平和集会が始まって、職員の伊波さん(平和(祈念)像の事について色々しる事ができました。山田真山さんが作った平和(祈念)像には、2度と戦争を起こしたくないという思いがこめられたと言っていました。私は山田真山さんの思いをこわしたくないです。

平和祈念堂は、平和の良さ、戦争の苦しさをはつきりさせてくれました。色々、勉強になりました。

(6年1組 大宜見彩花)

今回は、私達の修学旅行の平和の学びに協力してくださりありがとうございました。

最初、平和祈念堂ってどうゆうところなのかあと思っていました。実際行ってみると、空気がしてウキウキしていたらダメだな、気持ち切り替えないと!と思いました。いくさぬわらびを見

ると、本当に戦争はおそろしいと思いましたが。たった1つしかない命を、簡単に殺してしまい、絶対にゆるせないと思えました。あの大きな像にもたくさん思いがつまっています。人々の戦争は二度としたくない"というこの思いが一つになつたからこそ、あれだけ大きな像ができたと思います。私はあの像を見て、すぐに思いました。あの顔は人々の幸せを願っているような顔だなと。

私はあの像を見ることで、新たな自分に出会えた気がします。平和祈念堂で感じるものはすごく強かったです。幸せはいつ消えてもおかしくない。だからこそ、学んだことを日ごろの生活に生かし、戦死者達の思いをせおって大切に生きたいです。本当にありがとうございました。

(6年5組 永野みのり)

5月14日、岡山県玉野市立日比中学校(57人)が訪れ、平和集会が行われた。東南アジア諸国の青年たちと国際交流を持つ同中学校は、タイやフィリピンの中高生から送られた折鶴と同校の生徒が折り上げた鶴を一つにして奉納を行った。その折鶴奉納の趣旨を紹介する。

「平和への思いをタイ・フィリピンの」

方々とともに

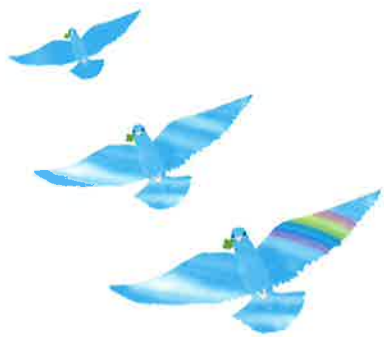
私たち岡山県玉野市立日比中学校は、平成30年度に内閣府主催の「東南アジア青年の船」事業に参加する東南アジア10カ国の青年30人を招き、交流会をもちました。その活動の中で、その人たちを含む東南アジアの青年たちが、船上で、折り鶴に込められた思いを知り、鶴を折りました。それらを私たちが折った鶴と一緒に千羽鶴にして、広島平和学習で広島

を訪れ、平和集会で献納しました。

このようなつながりを経て、今回の沖繩の修学旅行でも、前回鶴を折った青年たちが呼びかけ、タイやフィリピンの中高校生が鶴を折ることになりました。それを日比中学生とともに、沖繩の地に平和の願いを届けようということになり、実現しました。タイやフィリピンから届いた折り鶴の紙の裏には、それぞれの平和への思いや願いのメッセージが書かれています。私たちの今回の修学旅行のストーリーは

「僕らが平和の架け橋」

です。戦争の悲惨さ、恐ろしさを忘れず、同じ過ちを二度と繰り返さないよう命を大切にする心、自分だけでなく他人も一人が未来を明るく楽しく生きられるように平和の大切さを伝えていきます。そして、今回の研修で学んだことを忘れず、未来へ生かし、これからの未来を平和にしていきたいと思います。世界の人々と手を取り合って、平和な世の中をつくっていきます。



金城芳子基金の

助成対象者を決定

4月22日、当協会が主催する第27回(平成31年)金城芳子基金(沖縄女性のため、社会的に意義のある活動や研究調査活動に対する助成事業)は運営委員会(由井晶子委員長)を開催し、応募があった4件の中から、高内悠貴氏の「アメリカ施政権下(1945-72)に沖縄で行われたアメリカ軍法会議記録の調査」を助成者に決定、5月14日に発表した。助成金30万円が贈られる。

NPO法人手話ダンス

YOU&I 沖縄「わかば」による手話ダンス

6月1日、NPO法人手話ダンスYOU&I 沖縄「わかば」(宮里善江代表)が、平和の礎刻銘者追悼奉納「手話ダンス」を開催した。沖縄「わかば」に所属する10団体のサークルメンバーが、「さとうきび畑」「ていんさくの花」「月桃」など数10曲をその歌詞を口ずさみながら手話とダンスで表現し、来場した約100人と共に戦没者への追悼と恒久平和を祈願した。



沖繩平和祈念堂

改修工事寄付金

沖繩平和祈念堂改修工事に関するご寄付について

開堂から41周年を迎える沖繩平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

※詳細は「公益財団法人沖繩協会」のホームページより

沖繩研究奨励賞推薦応募案内

第41回(令和元年度)沖繩研究奨励賞 推薦応募案内

本奨励賞は沖繩を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学・人文科学・社会科学)を行っている新進研究者(又はグループ)の中から、受賞者3名を選考し、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰するものです。

※詳細は「公益財団法人沖繩協会」のホームページより

第39回「こどもまつり」

「ジュモ琉球芸能奉納」

こどもの日の5月5日、第39回「こどもまつり」でも琉球芸能奉納を開催した。子ども達の健やかで心豊かな成長を願い、芸能をとおして平和の尊さを考え学ぶことが目的。平和祈念像の前で2歳児から小・中・高校生に沖繩県立芸術大学琉球芸能専攻琉球古典音楽コースの学生・OBが琉球舞踊・創作太鼓・空手演武、琉球古典音楽の数々を奉納献奏した。出演者127人と観衆をあわせた約500人が、戦没者に思いを寄せ、世界の恒久平和を願った。



沖繩平和祈念堂美術館

沖繩出身画家作品紹介①

沖繩平和祈念堂の理念に賛同された日本洋画壇や世界洋画壇で活躍する画家、沖繩出身画家(物故画家含む)から寄贈された大作絵画を美術館(堂内前室ホール・美術展示室)において展示している。昭和56年、沖繩県内初の(開館当時)美術館として開館した当美術館は、平和祈念堂が目指す「美と平和の殿堂」の一翼を担うとともに、沖繩の芸術文化の振興に大きく貢献している。今回より美術館が所蔵する沖繩出身画家の作品をシリーズで紹介する。



安次富長昭 作 唐破風(からふぁーふ) P150

制作意図

今年は沖繩戦から65年の節目に当たります。沖繩が、平和・文化創造の中心になることを希って「唐破風」を制作しました。沖繩では「からふぁーふ」(Karakura)と言えば、首里城正殿を意味します。沖繩戦後の瓦礫の中から蘇った首里城は、今や沖繩の平和・伝統文化のシンボルとなっています。かつて、沖繩が琉球王国であったとき、琉球は武器を持たず、海外交易で富と独自の文化を築きあげてきました。その象徴として輝いていたのが「唐破風」でした。この輝きをこれからも世界に広げていって欲しいと希っています。(平成22年6月1日寄贈)

安次富長昭(昭和5年生・沖繩県)

琉球大学美術工芸科卒。ニューヨーク・プラット・インスティテュート大学院美術専攻中退。第56回国展審査委員長、名古屋市美術館主催「戦後日本のリアリズム展」招待出品。第6回沖展、沖繩タイムス社賞(沖展賞)、沖繩タイムス社芸術選賞大賞、紺綬褒章、通産大臣表彰、郵政大臣表彰、沖繩県文化功労者、瑞寶中級章、琉球大学名誉教授、国画家会会員、沖展会員。著書『沖繩の伝統工芸』『沖繩美術全集』(共編著)『抽象への展開』『絵画と教育』(共著)『安次富長昭作品集-光・風・土への憧憬-』ほか。